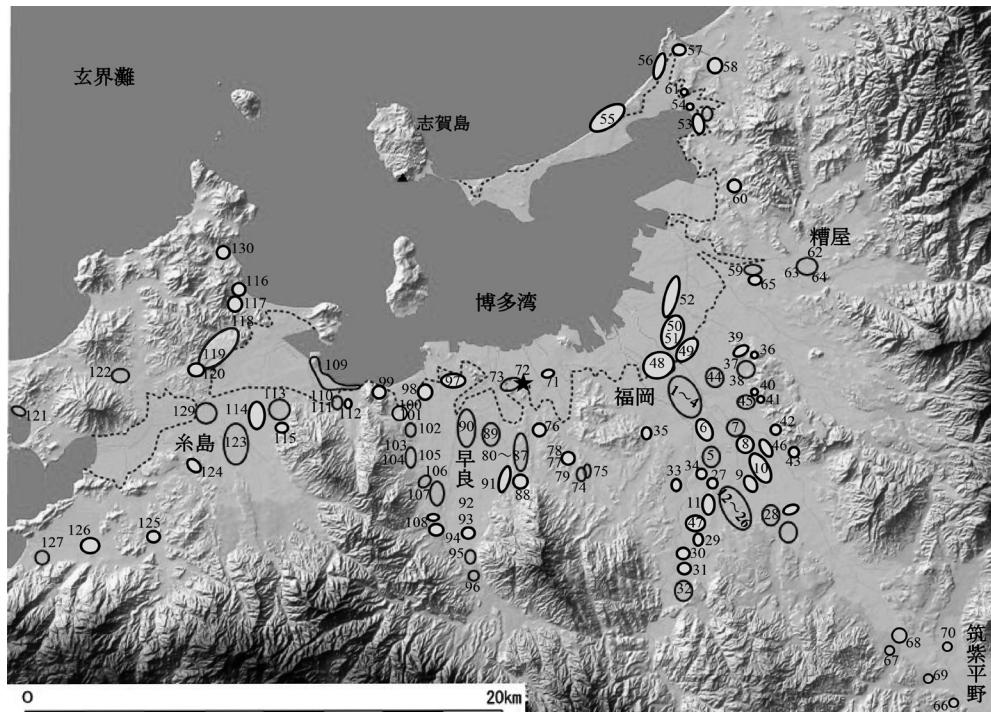


第3章 九州内の西新町遺跡

第1節 玄界灘沿岸地域における西新町遺跡集落の特質

1. はじめに

博多湾沿岸では、縄文海進のピークが過ぎてから砂丘の形成がはじまり、箱崎砂層と呼ばれる堆積層を基盤とする砂丘の各所に、弥生時代の集落や墓が分布する。西新町遺跡もそのような遺跡の一つとして、博多湾沿岸の中央、早良平野の北部に成立する（第52図72）。ここでは西新町遺跡の集落の成立と発展の過程を整理し、博多湾沿岸や玄界灘沿岸地域における古墳時代集落としての位置づけを行う。

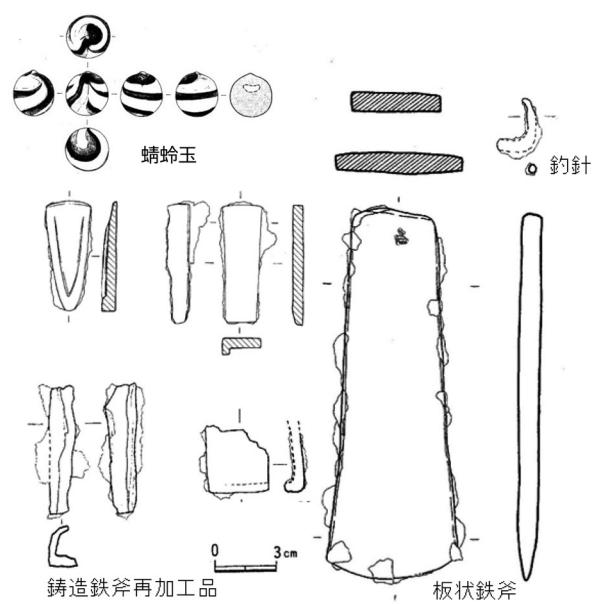
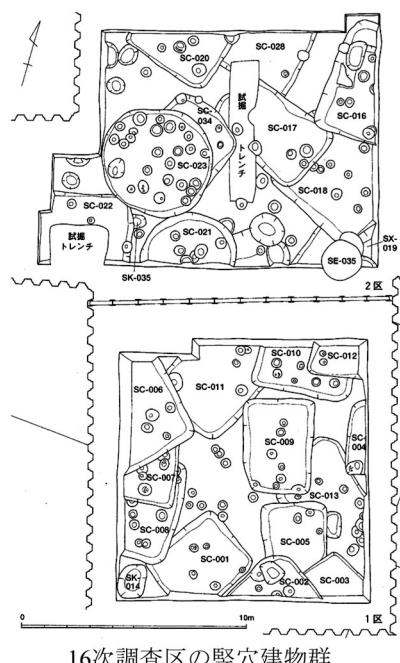


- 【福岡平野】 1~4. 比恵・山王・那珂遺跡群、東那珂遺跡 5. 井尻B遺跡 6. 五十川遺跡 7. 板付遺跡
8. 高畠遺跡 9. 南八幡遺跡 10. 麦野C・A遺跡 11. 弥永原遺跡 12~26. 須玖遺跡群 27. 御陵遺跡
28. 駿河遺跡 29. 門田・辻田遺跡 30. 松木遺跡 31. 仲遺跡群 32. 安徳台遺跡 33. 野多目A遺跡 34. 寺島遺跡
35. 中村町遺跡 36. 中尾遺跡 37. 久保園遺跡 38. 席田大谷遺跡 39. 席田青木遺跡 40. 下月隈B遺跡
41. 上月隈遺跡 42. 立花寺遺跡 43. 影ヶ浦遺跡 44. 雀居遺跡 45. 下月隈C遺跡 46. 井相田C・D遺跡・仲島遺跡
47. 警弥郷B遺跡 48. 博多遺跡群 49. 吉塚遺跡 50. 吉塚本町遺跡 51. 堅粕遺跡 52. 箱崎遺跡
【福岡平野東部～糟屋平野】 53. 唐ノ原遺跡 54. 梅ヶ崎遺跡 55. 奈多砂丘B遺跡 56. 三苦遺跡 57. 永浦遺跡
58. 夜白三代地区遺跡群 59. 多々良込田遺跡 60. 香椎A遺跡 61. 下和白遺跡 62. 蒲田水ヶ元遺跡
63. 蒲田部木原遺跡 64. 部木原遺跡 65. 内橋坪見遺跡
【筑紫平野北部】 66. 以来尺遺跡 67. 貝元遺跡 68. 立明寺遺跡 69. 仮塚南遺跡 70. 永岡岸元遺跡
【早良平野東部】 71. 鳥飼遺跡 72. 西新町遺跡 73. 藤崎遺跡 74. 長尾遺跡・宝台遺跡 75. 樋井川A遺跡
76. 別府遺跡、田島A遺跡、田島B遺跡 77. 浄泉寺遺跡 78. 神松寺遺跡 79. 片江B遺跡 80~87. 飯倉A~H遺跡
88. クエゾノ遺跡 89. 原遺跡 90. 有田遺跡群 91. 野芥遺跡 92. 田村遺跡・四箇遺跡 93. 四箇船石遺跡
94. 岩本遺跡 95. 東入部遺跡 96. 岸田遺跡・松木田遺跡
【早良平野西部】 97. 姪浜遺跡 98. 生ノ松原遺跡 99. 長垂大谷遺跡 100. 湯納遺跡 101. 宮の前遺跡
102. コノリC遺跡 103. 野方岩名隈遺跡 104. 野方中原遺跡 105. 野方久保遺跡 106. 羽根戸原B・C遺跡
107. 吉武遺跡群・太田遺跡 108. 浦江遺跡・浦江谷遺跡・金武城田遺跡
【糸島平野】 109. 今山遺跡・今宿遺跡 110. 今宿五郎江遺跡 111. 大塚遺跡 112. 青木遺跡
113. 飯氏遺跡・蓮町遺跡 114. 千里遺跡 115. 千里大久保遺跡 116. 大原A遺跡 117. 大原B遺跡 118. 桑原遺跡
119. 元岡桑原遺跡群 120. 沼桂木遺跡・泊リュウサキ遺跡 121. 御床松原遺跡 122. 一の町遺跡 123. 三雲遺跡群
124. 上鐘子遺跡 125. 本田孝田遺跡 126. 曲り田遺跡 127. 深江井牟田・深江城崎・二丈中学校内遺跡群
128. 吉井水付遺跡 129. 潤地頭給・志登遺跡群 130. 小田C遺跡

第52図 弥生時代後半から古墳時代前期の主な遺跡

2. 弥生時代中期の西新町遺跡

西新町遺跡の成立は弥生時代中期後葉である。近接する藤崎遺跡は弥生時代初期からの墓地遺跡であるが、その一連の砂丘上（標高3～4m前後）の東側に成立する集落で、藤崎遺跡からは独立した墓地も付随する。西新町遺跡全体の中ではその南西部の東西約250m、南北約80mの範囲に限定され、西に集落、東に墓地が分布する構成である（第53図、第9表、森本2013a・2022）。



第53図 弥生時代中期後半の西新町遺跡

16次調査区は古墳時代以降の遺構がほとんどなく、弥生時代中期後葉から後期前葉の竪穴建物群がよく遺存している。建物は小型方形竪穴建物が多い。9次調査区では大型円形建物が分布する。

出土遺物では、未成品を含む多量の滑石製石錘が出土しているほか、板状鉄斧（鉄素材）や鋳造鉄斧片再加工品、ガラス製蜻蛉玉といった舶載遺物も少なくない。青色と白色のガラスを巻き付け成形した蜻蛉玉は16次調査区竪穴建物内の弥生時代中期の土器の下から出土したもので、材質分析の結果、インド・東南アジア産のソーダー石灰ガラス製とされる。朝鮮半島北部の楽浪郡には南海ルートを通じた文物も入っているので、このガラス玉も入手先は楽浪郡であった可能性が高い。

甕棺墓群は二列埋葬状の集団墓であるが、諸岡型貝輪副葬や人体に嵌入した可能性のある銅剣切先がみられる。同時期の墓に副葬品がみられない藤崎遺跡よりもランクの高い墓地とみるが、大型甕棺を二個合わせた埋葬は少なく、玄界灘沿岸域の甕棺墓制の中でみれば、あまり高いランクではない。一方、首と胴体を別々に埋葬した甕棺墓や、首だけを埋葬した土器棺など、特異な断体埋葬の事例が目立ち、集団としての特殊性を物語るものかもしれない。

石錘は博多湾東部圏の構成であり（森本2015b）、鉄製釣針などの漁労具も出土している。一方、石包丁の出土は極少量である。漁労と交易活動を生業の主体とする「海村」（武末2009）の典型に該当するであろう。弥生時代後半期から対外交渉が活発化する博多湾沿岸地域の窓口であり、外港として成立した集落と考えられる。集落は後期前葉までは連続的に存続するが、後期中葉～後葉は遺構遺物が激減している。

東約5kmには、弥生時代中期前葉に集落が形成され、古墳時代前期まで存続する博多遺跡群があるが、西新町遺跡のピークである弥生時代中期後葉の遺構は希薄である。西新町遺跡と博多遺跡群間で集落居住集団の移動があった可能性が考えられる。西新町遺跡は早良平野だけでなく、福岡平野側の外港も担うために形成されたのであろう。

西新町遺跡が後期前葉まで一度衰退するのは早良平野の全体的な傾向でもあるが、博多湾沿岸地域における対外交渉の窓口が後期のなかで糸島平野（「伊都国」）と福岡平野（「奴国」）に二極化していく動向とも関連していて（森本2011、2013a）、前述のような遺跡の消長からみて、博多遺跡群等へ集落居住集団が移動した可能性を考える。

3. 古墳時代の西新町遺跡

（1）集落の消長

弥生時代終末期から古墳時代前期の西新町遺跡は集落が再形成され第二のピークを迎えるが、土器編年の先行研究（久住1999・2017、重藤2009）などから、以下のような時期区分の理解で、西新町遺跡集落の様相を整理したい。

- ・弥生時代終末期：集落としての再形成期
- ・古墳時代初頭：土器様相は弥生時代終末期から連続的。カマド付建物の出現（5次SC9）
- ・古墳時代前期前葉古段階：布留式系土器の普及期で、朝鮮半島系を含む外来系土器が増加
- ・古墳時代前期前葉新段階：おおむね久住氏のII C期、重藤氏の西新IV式古段階
- ・古墳時代前期中葉：集落としての終盤期

*古墳時代前期前葉は布留I式併行、古墳時代前期中葉は布留II式併行期と考えられる。

(2) 集落域の拡大と集約化

弥生時代終末期の建物数は少ないが、古墳時代初頭にかけて、古墳時代集落域の全域に分布する。弥生時代中期集落よりも東・北に拡大しており、東西約450m、南北約250mの範囲である(第54図)。西の藤崎遺跡でも弥生時代終末期の集落形成がみられるが、古墳時代初頭からは方墳群などの墓域が形成され、西新町遺跡の墓地とみる見解が多い¹⁾。

古墳時代前期前葉古段階もおおむね同じ分布域であるが、2次調査区以北の密度が高くなり、各種のカマド付建物も増加する。第55図は古墳時代前期中葉までを含むが、カマド付建物の分布が遺跡内でも限定された区域であることが分かる。西新町遺跡のカマドはI～III類に大別され、それぞれ煙道の構造等により細分することができる(吉田2009)。本稿の集落分析では以下のような大別分類で整理することとする。

- ・カマドI類：燃焼部・煙道を建物の隅角付近に配置
- ・カマドII類：煙道の長いオンドル状構造で、燃焼部を壁または建物の中央付近に配置
- ・カマドIII類：燃焼部・煙道を建物壁中央付近に配置

初期はI類のみであるが、前期前葉にはI～III類の複数種となり、小型建物にも伴う(第55図に図示したカマド付建物の代表事例はいずれも古墳時代前期前葉新段階)²⁾。

古墳時代前期前葉新段階は遺構数、遺物量ともに西新町遺跡のピークであるが、分布域は古段階よりも狭くなっている、集約化と捉えることができる(第54図の東北部、実線範囲)。

(3) 全盛期の古墳時代前期前葉新段階の集落構成

古墳時代を通じて、建物の主体は竪穴建物であり、掘立柱建物は不明である。建物以外では、廃棄穴とみられる土坑や井戸とみられる大型土坑などがあり、集落域東部の13次調査区東部や4次調査区では溝状遺構もみられる。

古墳時代前期前葉新段階の集落構造(建物構成)をもう少し詳細に検討し、ピーク時の同時併存建物と集落規模を推定してみたい(第56図)。

当該期の竪穴建物は128棟抽出することができ、面積を推定できるものは、72棟である。

【10m²未満】5棟、【10m²以上15m²未満】28棟、【15m²以上20m²未満】17棟、

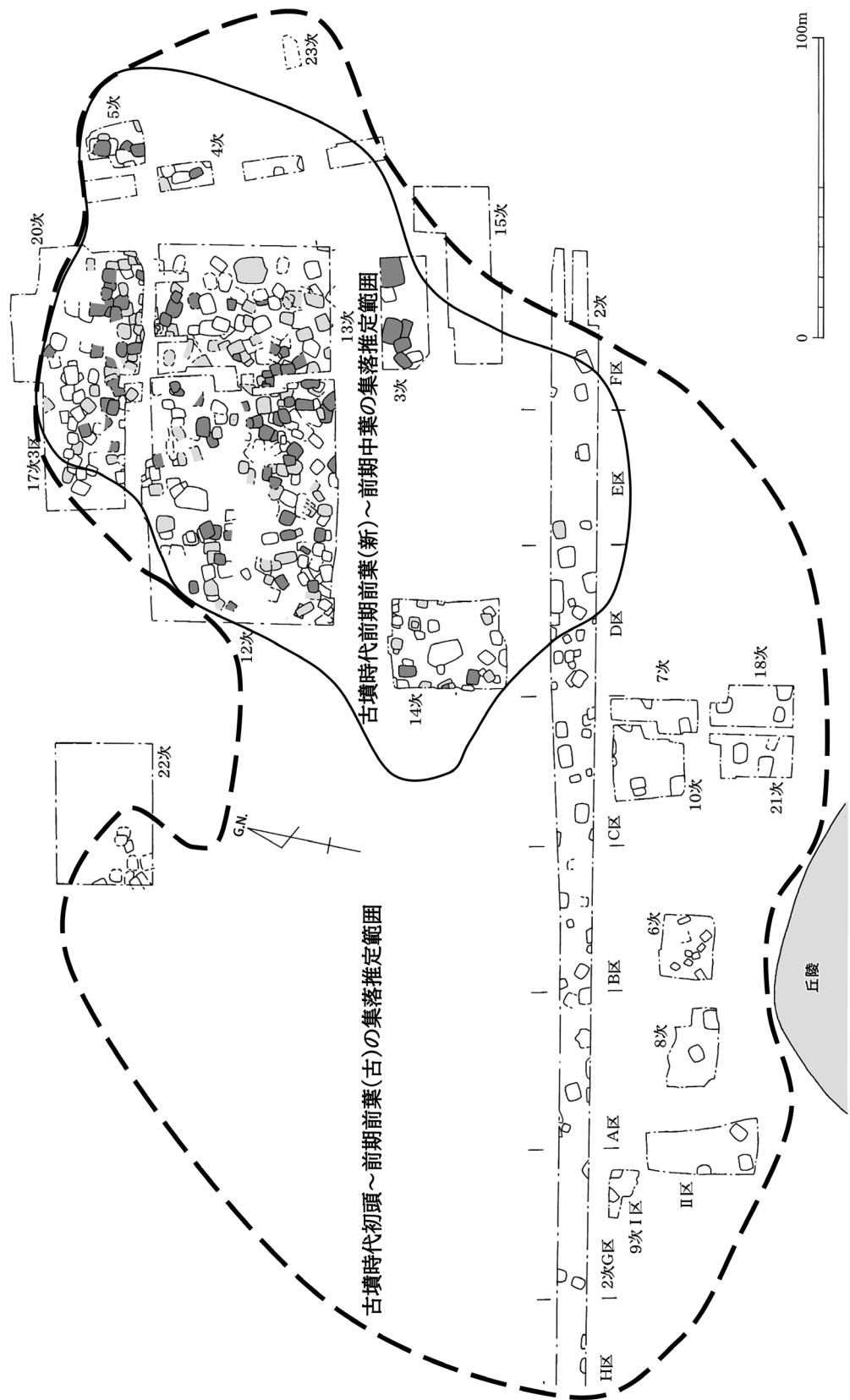
【20m²以上25m²未満】13棟、【25m²以上】9棟である。

15m²未満の小型建物が45.8%と、半分近くを占めている。

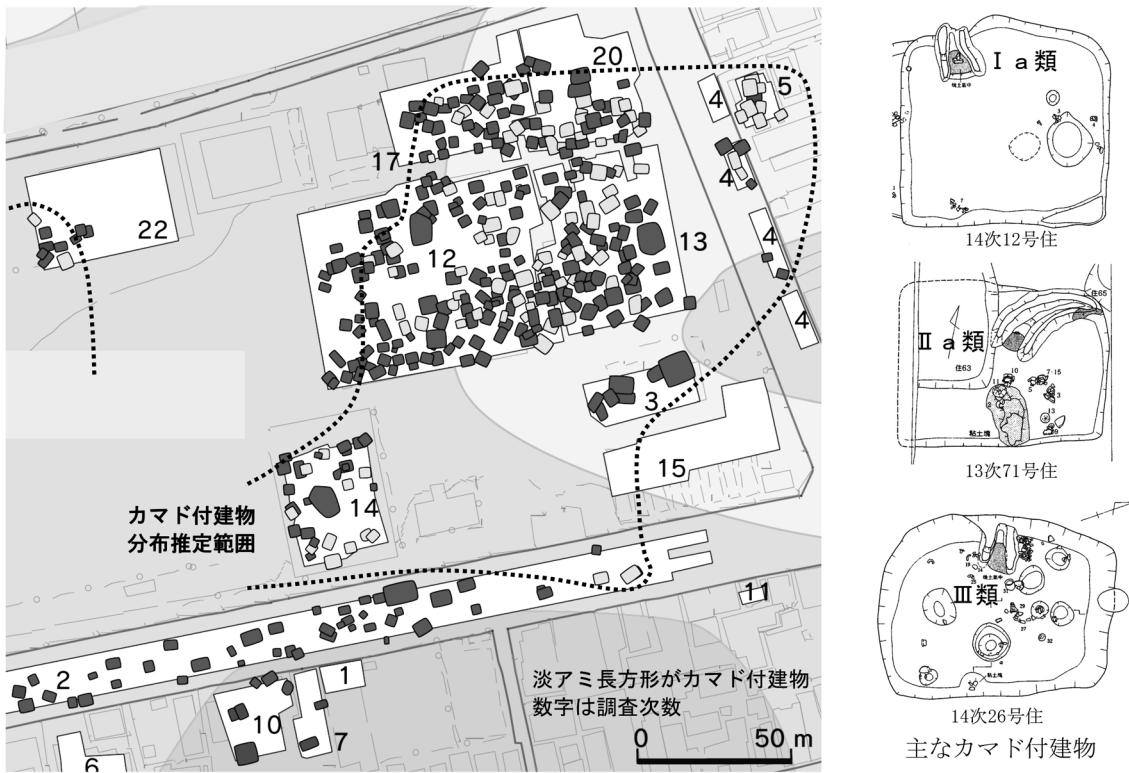
竪穴建物は伏屋式または定型的な主柱構成をとらない長方形建物が主体であり、小型建物の比率の高さからみて、テント構造も少なくなかったかもしれない。

カマド付建物は45棟あり、型式が特定できるものは【I類】17棟、【II類】19棟、【III類】8棟の44棟である。建物全体に占めるカマド付建物の比率は35%であるが、部分的検出の建物も少ないので、さらに比率は高くなるであろう。

第56図では当該期の建物を長方形で囲み、その内で同時併存を推定できる建物にアミ掛けしている。カマドの表示はこの抽出した同時併存建物を対象とし、その配置場所を模式的に示した。また、当該期の主な朝鮮半島系土器と舶載鉄器を掲載している。図中の建物に付した番号は、それらの遺物が出土した建物や第55図に実測図を示したカマド付建物の遺構番号と対応している(調査次数の番号については省略しているので、第54図または第55図と合わせて参照されたい)。



第54図 西新町遺跡における古墳時代の竪穴建物分布（下原2009加筆）



第55図 西新町遺跡東部の古墳時代建物とカマドの分布

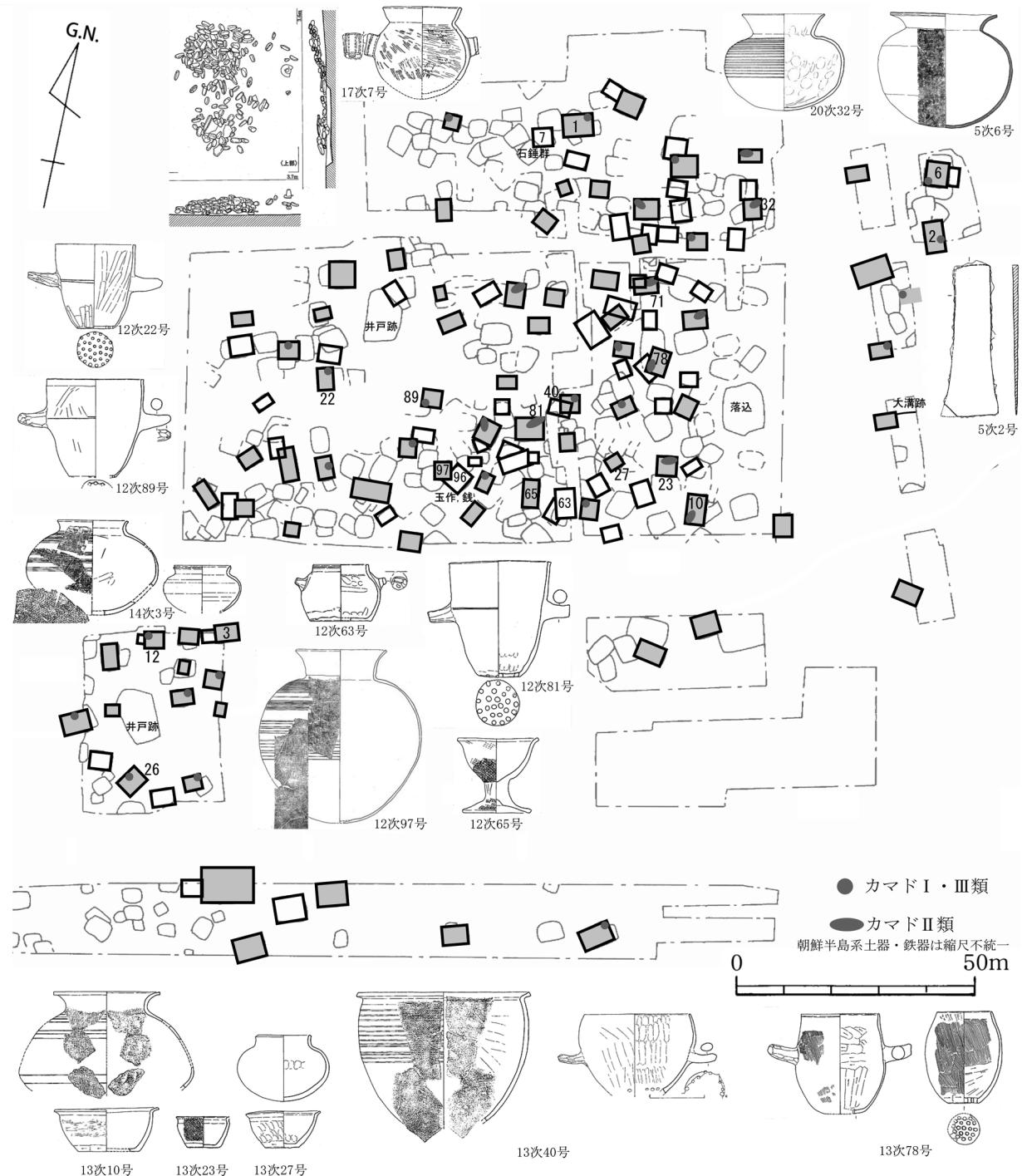
同時併存建物は、主要なカマドや出土遺物のある建物を中心に、重複関係や主軸方向などを考慮して抽出している³⁾。竪穴間の間隔は、弥生時代後期の八尾南遺跡（大阪府）例などを参考として、3mを超えるものとする。抽出した同時併存建物は83棟、うちカマド付建物36棟(43%、I類19棟、II類11棟、III類6棟)である。実態はもう少し、建物密度やカマド付建物の比率が低かった可能性がある。

12～14・17・20次調査区の建物群は高密度で群集するが、井戸跡（当該期はおおむね埋没している）の周囲は空閑地となっており、広場であったとみられる。井戸が機能した時期も含め、特別な広場として古墳時代集落のレイアウトを規定する空間であったとみられる（祭祀や交易の場であったと考えられるが機能の特定は難しい）。また、当エリアには、漁労具を管理した建物（17次7号：漁網を構成する石錘群一式の出土）や玉作工房（12次96号）なども分布している⁴⁾。

一方、2～5次調査区の建物群は一定間隔で分布し、前述の調査区よりも密度が低い。当該期集落範囲の東・南限に近いとみられる。このように、集落全体の構成は、小単位群の集合ではない面的な分布であり、特に、港の存在を想定する集落西北側の密度が高くなる建物配置となっている。

また、西新町遺跡の前後の段階でカマドが北部九州に定着していないことから、カマド付建物の多くは朝鮮半島から渡來した人々の居住を想定するが、使用土器には韓・倭の各系譜が混在している⁵⁾。山陰、瀬戸内、近畿地方などを含む豊富な外来系土器全体の分布的傾向からみても、朝鮮半島各地に加え、日本列島内各地からの外来者が、出身地域ごとにエリア分けされることではなく、混在して居住するマチの姿が想定されるであろう。

当該期の遺構が分布するエリアは、発掘調査面積にして14,983m²であるが、集落推定域（第54図実線範囲）は南西・北東方向に広がる長さ約200m、幅約150mの約30,000m²である。集落域



第56図 古墳時代前期前葉（新）の同時併存建物の推定

内でも縁辺に近いほど建物密度が低くなる傾向があり、かなりの誤差を含む数字ではあるが、150棟前後という建物数が西新町遺跡・古墳時代集落のMaxに近いと推定する。

後続する古墳時代前期中葉は、やや建物数の減少と分布域の縮小がみられるが、発掘調査で検出された竪穴建物は58棟（切り合いあり）、うちカマド付建物18棟（I～III類）で、ピークは続いている。高比率な朝鮮半島系土器をはじめとする外来系土器（12次21号建物等）や舶載遺物（17次5号建物の鉛片）の出土もみられ、交易拠点としての機能は維持されている。

4. 交易と漁労の新たな拠点形成

古墳時代前期の西新町遺跡における朝鮮半島系土器の集中的出土は「博多湾貿易」提唱の指標となっている（白井 2001、久住 2007）。筆者の理解では、西新町遺跡をとりまく、玄界灘沿岸地域の対外交流の様相変化は次のとおりである（森本 2010・2015a・2018b・2020b・2023b）。

【弥生時代中期後葉から後期前葉】

楽浪系土器をはじめとする新たな外来系土器の分布拡大が、対馬と壱岐を通じて、博多湾沿岸や出雲に及ぶ。糸島平野（伊都国）と福岡平野（奴国）の長距離交易システムの形成期である。当該期の西新町遺跡において朝鮮半島系土器の出土はないが、舶載鉄器やガラス製品の出土から、早良平野とおそらく福岡平野側の外港を担っていたとみられる。

【弥生時代後期中葉から終末期前半】

糸島平野を中心に朝鮮半島系土器の増加がみられ、糸島・福岡の各平野では、対外交流におけるネットワーク形成や集落ごとの役割分化が顕著となる。壱岐・カラカミ遺跡の活性なども糸島平野と福岡平野の各々で進む交易システムの確立に大きな作用を及ぼしたであろう。

【弥生時代終末期後半から古墳時代初頭】

福岡平野における朝鮮半島系土器の増加は、主導権を握ろうとする糸島平野に対抗する動態として捉えることができる。

【古墳時代前期前葉～前期中葉】

糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡において朝鮮半島系土器の出土が集中する。帶方郡の衰退期であり、中国と朝鮮半島南部を結ぶ要衝の半島西南部地域からの渡来が活発となるが、渡来人の滞在と交易の場が西新町遺跡に集約される段階である。当該期における壱岐・原の辻遺跡や対馬の三韓系土器・三国系土器の様相変化とも相関性があり、両島が中継して、西新町遺跡に集約されるネットワークが想定される。また、西新町遺跡が古墳時代前期における対外交易の一大拠点となっていくなか、博多湾沿岸と出雲平野や畿内地域などを結ぶ、汎列島的な新しい交流ネットワークも成立し、それは古墳時代前期前半の広域的な社会変化をリードする役割も担ったと考えられる。

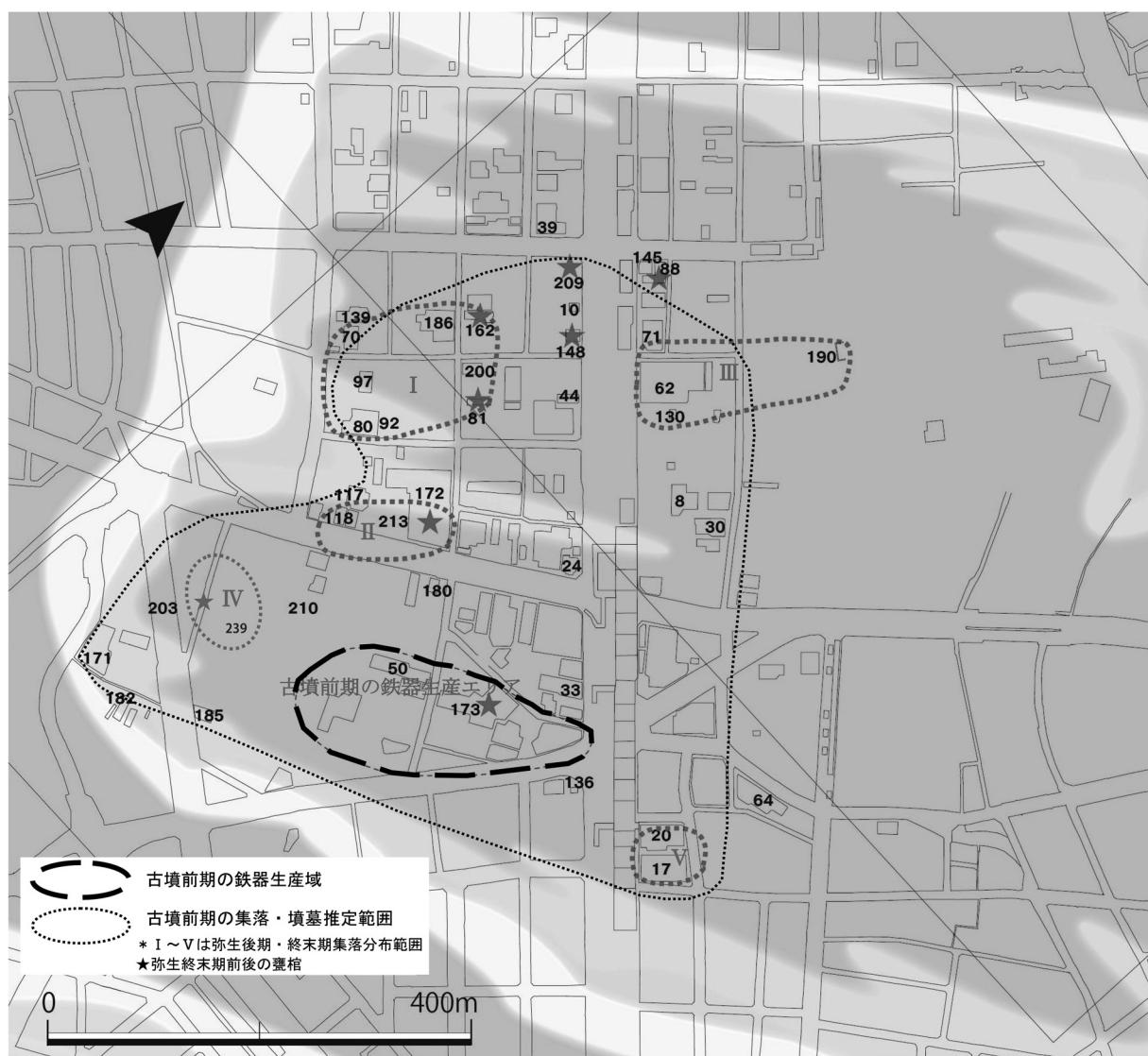
集落の消長などからみて、少なくとも古墳時代前期までは弥生時代的な伊都国、奴国といった枠組みが存続すると考えるが、古墳時代前期前葉に、糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡が対外交易の新しい中心地となる背景には、伊都国、奴国、畿内政権等、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいるのであろう⁶⁾。

また、西新町遺跡は古墳時代の博多湾沿岸における漁労の新たな拠点としての機能も担っていた。古墳時代前期には、大阪湾・瀬戸内に由来する、飯蛸壺、管状土錐等を用いる漁労技術や土器製塩と複合した海産物加工技術が博多湾沿岸一帯にひろがるとともに、博多湾西部圏の漁労具が東部圏へ浸透するようになる。東西の地域差は依然として小さくはないが、西新町遺跡を結節点として、在来の海人集団も再編され、博多湾の東西をつなぐネットワークがより強固になるとみている（森本 2015b）。その背景には、交易を前提とした水産資源の拡大需要があったのであろう（大庭 2023）。

5. 玄界灘沿岸西部の古墳時代前期集落と西新町遺跡

西新町遺跡のある博多湾沿岸地域は、玄界灘沿岸の中央にあって、西から糸島、早良、福岡の各平野の大地域単位に区分され、さらに東に糟屋平野がある。福岡平野の南東部は二日市地峡帯を通じて筑紫平野につながっている（第52図）。

福岡平野と糸島平野には首都としての位置づけができる中核的な集落が存在し、「大規模拠点集落」と呼ぶことにする。50～100haを越える遺跡範囲のほぼ全域に及ぶ面的な遺構分布に加え、出土遺物の量と内容（広域ネットワークと物流を示唆する外来系遺物の比率の高さ）等から総合的に卓越した集落遺跡で、福岡平野北部の比恵・山王・那珂遺跡群、糸島平野の三雲・井原遺跡群がこれに該当する。いずれも弥生時代後半期からの大規模拠点集落である。比恵中央には首長居館の区画溝とみられる方形環溝群があり、弥生時代中期後葉ないしは後期前葉から古墳時代前期にかけて、連続的かつ大型化の発展的変遷をみせる（久住2008）。最大規模の2号環溝（辺70m）が西



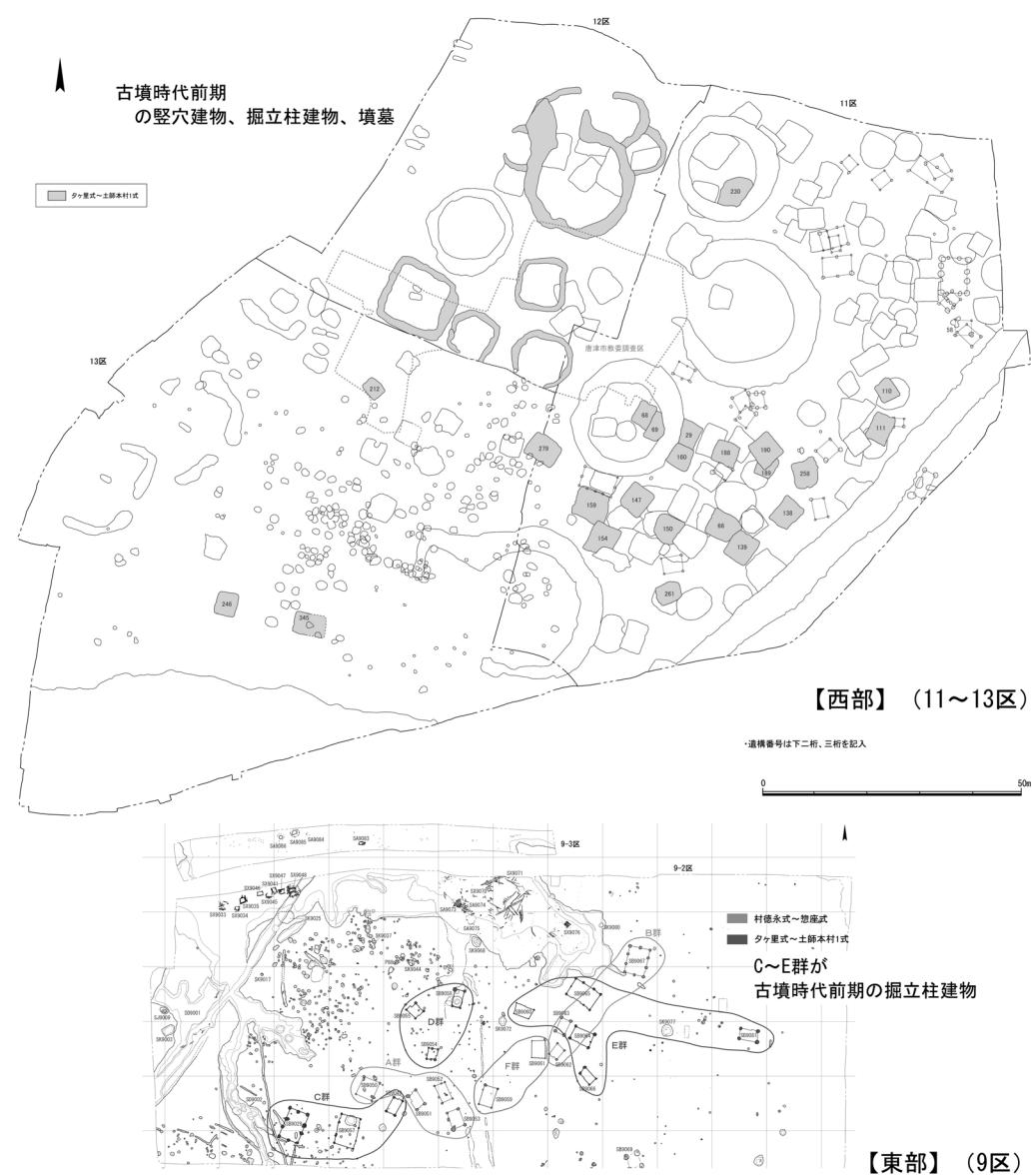
第57図 博多遺跡群

新町遺跡の古墳時代集落と同時期の方形環溝である。一方、福岡平野南部の須玖遺跡群も古墳時代まで継続するが、生産（青銅器・鉄器・ガラス）も含めて拠点ではなくなる。

そして、博多遺跡群における鉄器生産、今山・今宿遺跡の土器製塩、潤地頭給遺跡の玉作など、当該期には博多湾沿岸の広域で相互補完的な分業体制が成立しており、西新町遺跡も対外交易の拠点等として、博多湾沿岸の分業体制を担う集落の一つとみることができる（吉留 2004、久住 2007）。特に海浜砂丘上や河口に分布する湾岸立地の集落が重要な役割を担っていた（第9表）⁷⁾。

（1）湾岸立地集落の中での対比

博多遺跡群の古墳時代前期はフイゴ使用の精錬鍛冶技術を有する遺跡としてよく知られる。その鉄器生産拠点は弥生時代の集落がほぼ分布しないエリアに形成されるが（第57図）、博多湾沿岸地域の弥生時代鍛冶遺跡の多くが終末期までに操業を終えることから、広域の鍛冶集団を再編し、



流通の拠点である博多に新たな鉄器生産センターが形成されたと考える（森本 2020a・2023a）。西新町遺跡を含め、博多湾沿岸の特定集落ごとに個別の機能を集中させる分業体制がとられるのである。

一方、玄界灘のさらに西に位置する唐津湾沿岸では、砂丘上の中原遺跡が弥生時代後期後葉から平野の中核を担うとともに、鉄器生産や対外交易等の拠点でもあることから、集約化や分業体制には、平野の規模等の自然環境も関係する地域差がうかがえる。中原遺跡の古墳時代前期前半は堅穴建物 28 棟以上が集中するエリアの北西に、前方後円形を含む古墳群が分布し、東部には倉庫域とみられる掘立柱建物群が分布している（第 58 図）。鉄器生産においてはフイゴ使用の精鍊鍛冶技術も導入されている⁸⁾。

また、外来系土器の様相から、博多湾東部の福岡平野から糟屋平野では、西新町遺跡に先行する弥生時代終末期前後に对外交流の拠点として形成される集落の増加が顕著である。湾岸部では唐原遺跡（日本海沿岸系）、多々良込田遺跡（近畿系ほか）、奈多砂丘 B 遺跡（朝鮮半島系ほか）などがあり、内陸部では松木遺跡（近畿系）などがある（久住 2005、森本 2013b、2015a、2018a）。いずれも古墳時代前期前葉（以降）まで集落は存続するが、外来系土器の出土はピークを過ぎており、これらの集落が担っていた对外交流の拠点としての機能は、西新町遺跡に集約されるようにみえる。

一方、外来系土器の中でも東海系土器については、西新町遺跡からほとんど出土していない。博多遺跡群周辺に多く、また、有明海沿岸・佐賀平野の諸富遺跡群のような多く出土する遺跡がある（久住 2005、2007、森本 2013b）。ただし、北部九州への東海系土器の流入は古墳時代初頭頃までが主体であり、西新町遺跡に外来系土器が集中する前期前葉段階は少ない（早野 2020）。この東海系土器の出土が目立つ博多遺跡群やその東の砂丘上に連なる、堅粕遺跡、箱崎遺跡などは、古墳時代前期前半を通じて、外来系土器の出土は多く、集落の拡大もみられる。また、いずれも遺跡内に墓域（古墳群）をもつ構成となっている。

对外交流の拠点としての機能が西新町遺跡に集約される中でも、博多遺跡群周辺ではそれに準じる機能が維持されたと考えられる⁹⁾。

（2）段丘や沖積地立地集落との対比

平野側では大規模拠点集落をはじめ、弥生時代後期・終末期から古墳時代前期前半にかけて継続する遺跡は多いが、その中でも古墳時代前期前半に遺構・遺物の数が顕著に急増する遺跡（堅穴建物数が 5 倍超などを指標とする）や、弥生時代中・後期集落との間に一定の空白期がある古墳時代集落は、西新町遺跡の消長とも連動している可能性がある。そのような集落を古墳時代前期の再開発集落として主なものをピックアップする（第 10 表、大規模拠点集落は除く）。

早良平野中央北部の段丘上に立地する有田遺跡群は弥生時代後期前葉まで一度、衰退するが、古墳時代前期初頭から堅穴建物が急増する。前期前半の建物数は 76 棟以上を数えるが、段丘上の南北 900m、東西 500m ほどの範囲の西北部と中南部を中心に分布する。細別時期ごとにみると、建物が散在する分布であり、密度は高くない。遺跡の北東部には古墳群が分布するが、古墳時代中期以降が主体であり、前期前半集落の墓域ではない。藤崎遺跡は西新町遺跡だけでなく、有田遺跡群集落居住集団の墓域も含んでいる可能性がある。

第9表 主な湾岸立地集落の消長（弥生時代後半期～古墳時代前期）

番号	遺跡名	立地	遺構	中期後半	弥生後期			終末	古墳前期前半	地図番号	地域
					前葉	中葉	後葉				
1	西新町遺跡 (南部) 調査次数: 2,6-11,14,16, 18,19,21	砂丘	竪穴建物	39	3			7	96	72	早良平野
			土坑など	○	○			○	○		
			包含層	○	○						
			甕棺	◎	○				△		
			遺跡の消長								
2	西新町遺跡 (北部) 調査次数: 3-5,12,13,15, 17,20,22,23	砂丘	竪穴建物					1~	362	73	早良平野
			土坑など			○		○	○		
			包含層	○	○	○	△				
			製塩						△		
			遺跡の消長								
3	藤崎遺跡 調査次数(集落): 1,9,27	砂丘	竪穴建物					5	2	97	97
			土坑など					○	○		
			包含層		△			△			
			甕棺・墳墓	◎	○				◎		
4	生ノ松原遺跡	砂丘	竪穴建物						2	98	98
			土坑など				○				
			遺跡の消長								
5	博多遺跡群 弥生後期分布	砂丘	竪穴建物	1	7	1	7	23	34	48	福岡平野～糟屋平野
			掘立柱建物						3		
			土坑など	○	○		○	○	○		
			道路・墳墓						○		
			鉄器生産						○		
			谷部の包含層	○	○	○	○	○	○		
6	箱崎遺跡 (東部)	砂丘	遺跡の消長							52	福岡平野～糟屋平野
			竪穴建物						72		
			甕棺・墳墓					○	○		
			井戸						○		
			土坑など						○		
			鉄器生産						◎		
7	唐ノ原遺跡	砂丘	遺跡の消長							53	福岡平野～糟屋平野
			竪穴建物			2	21	23	8		
			土坑など		○	○	○	○	○		
			谷部の包含層			○	○	○	○		
8	奈多砂丘B 遺跡 調査次数: 1,2	砂丘	遺跡の消長							55	福岡平野～糟屋平野
			竪穴建物						2		
			土坑など					○			
			谷部の包含層					○	○		
9	多々良込田 遺跡 調査次数: 1,6,7	沖積	遺跡の消長							59	福岡平野～糟屋平野
			竪穴建物						4		
			掘立柱建物						○		
			谷部の包含層				○	○	○		
10	今宿遺跡 調査次数: 1-5 今山遺跡 (東部)	砂丘	遺跡の消長							109	糸島平野
			竪穴建物						5		
			土坑など			○		○			
			墓	○	○	○		○			
			谷部の包含層	△	△	△	△	○	○		
			製塩					○	◎		
11	御床松原遺跡	砂丘	遺跡の消長							121	糸島平野
			竪穴建物	10	3	2	4	6	30		
			谷部の包含層	○	○	○	○	○	○		
			遺跡の消長								

第10表 古墳時代前期の主な再開発集落遺跡

番号	遺跡名	立地	遺構	中期後半	弥生後期			終末	古墳前期前半	地図番号	地域
					前葉	中葉	後葉				
12	有田遺跡群 調査次数: 6,15,29,35,52, 64,81,107,133, 142,149,168, 238,250ほか	段丘	竪穴建物	32	2			1	76	90	早良平野
			掘立柱建物	21	1				不明確		
			井戸	3	3				3		
			大溝						○		
			谷部の包含層	○	○			△	○		
13	野芥遺跡 調査次数: 4,12,23 野芥大藪遺跡	段丘 沖積	遺跡の消長							91	
			竪穴建物	3	1				1		
			土坑など						○		
			大溝(水路)					○	○		
14	岩本遺跡 調査次数:2	沖積	遺跡の消長							94	
			竪穴建物	2					15		
			(大型建物)						1		
			掘立柱建物	1							
15	東入部遺跡 調査次数: 2,4,5,8,9,11	沖積	遺跡の消長							95	
			竪穴建物	21	6				12		
			掘立柱建物	6					1		
			土坑など	○	○		○		○		
			谷部の包含層	○	○						
16	岸田遺跡 松木田遺跡 調査次数: 1-4	段丘	遺跡の消長							96	
			竪穴建物	20		2	7	21			
			(大型建物)	4		1	1	3			
			掘立柱建物	1			1	3			
			谷部の包含層	○	○						
17	田島A遺跡 調査次数:1-3 田島B遺跡	段丘	遺跡の消長							76	
			竪穴建物						6		
			土坑など						○		
			墳墓						○		
18	五十川遺跡 調査次数: 1-21	段丘	遺跡の消長							6	福岡平野
			竪穴建物					1	11		
			掘立柱建物						1		
			井戸	1					12		
			墳墓						○		
19	雀居遺跡 (南部) 調査次数:4,5	沖積	谷部の包含層	○			○	○	○	44	
			遺跡の消長								
			竪穴建物						24		
			掘立柱建物						13		
20	雀居遺跡 (北部) 調査次数:7-20	沖積	井戸					1	3	31	
			谷部の包含層	△				△	○		
			遺跡の消長								
			竪穴建物					3	32		
	仲遺跡群 調査次数:1-6	段丘	掘立柱建物					?	約30	31	
			井戸						1		
			土坑、溝など				△	△	○		
			遺跡の消長								

早良平野東部の野芥遺跡群や田島A・B遺跡も古墳前期前半の再開発集落に該当し、田島A遺跡では石蓋土壙墓を埋葬主体とする古墳をともなっている。

弥生時代後期の集落が希薄な室見川の中上流域・早良平野南部でも古墳時代前期再開発集落が点在している(第10表-14~16)。

福岡平野の五十川遺跡は北の那珂遺跡群と南の井尻B遺跡に挟まれた段丘上に立地するが、古墳群をともなう集落は、近隣遺跡群の集落域の拡大とみなすことができるであろう。雀居遺跡でも、北部に古墳時代の集落域が拡大する。平野南部では弥生後期後葉から集落形成がはじまる仲遺跡群の拡大が顕著である。

早良平野の中南部や福岡平野の南部で、古墳時代前期の新たな集落形成または拡大がみられるが、いずれも博多湾沿岸と佐賀平野を結ぶ山越えルート上の要衝に位置する。弥生時代からこのルートを通じた交流は想定できるが、古墳時代前期に博多湾沿岸と佐賀平野を結ぶ山越えルートによる交通関係の重要性が増すと考えられる（森本 2013b）。また、森林資源の開発の拡大についても、今後の検討課題となるであろう。

（3）西新町遺跡の母体について

砂丘上の西新町遺跡は南の祖原山丘陵と接しており、土器素材の粘土採掘も可能ではあるが、古墳時代集落のピークでは丘陵地から離れて、海側に拡大している点などからも、集落内での土器生産はほとんどなかったと考えられる。多種多量の土器は各地域の外来系搬入土器を含むが、主体をなす、北部九州で生産された土器（近畿系、山陰系等を含む）も博多湾沿岸の別の遺跡から供給されている可能性が高い。

古墳時代前期前葉は北部九州獨得の布留式系土器様式が山陰系土器と組み合わさって確立し、分布が広がる段階であるが（久住 1999）、西新町・藤崎遺跡を除く、早良平野の布留式系土器は甕を中心としたものであり、高壺や小型丸底土器などの精製土器はあまり振るわない傾向にある。山陰系土器も、鼓形器台は比較的浸透しているが、全体的に出土比率は低い。西新町遺跡の土器は北部九州の中でも布留式・山陰系の器種が豊富で、特に布留式系土器の様相は、博多湾沿岸地域の中で福岡平野の様相に近いといえる（久住 2005、森本 2013b）。西新町遺跡へは、早良平野の有田遺跡群などからも土器が供給されていたであろうが、質・量ともに、早良平野内の近隣集落からの供給だけでは不足であり、福岡平野などからの供給量は多かったと考えられるのである。農耕関連の遺物もほとんどないので、コメなどの食糧も平野側から多くの供給があったと考えられる。

集落構成でみると、西新町遺跡は早良平野の中で、最も建物密度が高い遺跡であり、段丘上の有田遺跡群や飯倉遺跡群などを凌ぐ、中核的な集落としての位置づけが可能である。

建物密度や遺跡規模で西新町遺跡を凌駕またはこれに匹敵する古墳時代前期集落は、大規模拠点集落の三雲・井原遺跡群や比恵・那珂遺跡群（さらに南の五十川遺跡、井尻 B 遺跡までを一連の遺跡群として捉えることができる）や、湾岸集落の博多遺跡群など、限られた集落しかない。

土器供給の視点からは、福岡平野の大規模拠点集落を母体とする西新町遺跡集落の成立が推定されるところではあるが、4でみた対外交渉・交易における拠点変遷の動態において、糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡が古墳時代前期前葉の新たな拠点として形成され、ここにその機能が集約されていく背景には、伊都国、奴国、畿内政権等、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいると考えられるのである。

6. 小 結

西新町遺跡は、漁労と交易活動を生業の主体とする「海村」として、弥生時代中期後葉に成立する。弥生時代後半期から対外交渉が活発化する博多湾沿岸地域の窓口の一つとみられる。集落は後期前葉までは連続的に存続するが、後期中葉～後葉は遺構遺物が激減している。福岡平野側の砂丘上の博多遺跡群とは弥生時代中期から後期の消長がずれており、西新町遺跡と博多遺跡群間で集落居住集団の移動があった可能性も考えられる。西新町遺跡は早良平野だけでなく、福岡平野側の外

港も担っていたのであろう。

弥生時代終末期から古墳時代前期には集落が再形成され、第二の盛行期を迎える。弥生時代中期集落よりも東・北に拡大しており、古墳前期前葉古段階には、各類型のカマド付建物や、朝鮮半島系土器の著しい増加がみられる。当該期は帶方郡の衰退期であり、中国と朝鮮半島南部を結ぶ要衝の半島西南部地域からの渡来が活発となるが、渡来人の滞在と交易の場が西新町遺跡に集約される。

さらに、古墳時代前期前葉新段階は遺構数、遺物量ともに西新町遺跡のピークであるが、分布域は古段階よりも狭くなっている、集約化と捉えることができる。南西・北東方向に広がる長さ約200 m、幅約150 mの3 haの集落域に対して、最大で150棟前後の建物数と推定した。そのうち、カマド付建物の比率は35～40%前後とみられる。

西新町遺跡の前後の段階ではカマドが北部九州に定着していないことから、カマド付建物の多くは朝鮮半島から渡来した人々の居住を想定するが、使用土器には韓・倭の各系譜が混在している。山陰、瀬戸内、近畿地方などを含む豊富な外来系土器全体の分布的傾向からみても、朝鮮半島各地に加え、日本列島各地からの外来者が、出身地域ごとにエリア分けされることなく、混在して居住するマチの姿が想定される。

また、古墳時代の博多湾沿岸における漁労の新たな拠点としての機能も担っていた。大阪湾・瀬戸内に由来する漁労技術や土器製塩と複合した海産物加工技術が博多湾沿岸一帯にひろがるなか、西新町遺跡を結節点として、在来の海人集団も再編され、博多湾の東西をつなぐネットワークがより強固になったと考えられる。

古墳時代前期の博多湾沿岸では、福岡平野と糸島平野の大規模拠点集落を中心とした、広域で相互補完的な分業システムがとられ、弥生時代後半期の枠組みを継承しているが、対外交易や鉄器生産の機能が特定集落の弥生時代とは不連続なエリアに集約されるなど、古墳時代前期の変化は大きい。特に海浜砂丘上や河口に分布する湾岸立地の集落が重要な機能を担っていた。西新町遺跡は早良平野の中で最も建物密度が高い遺跡であり、平野の中核的な集落としての位置づけも可能である。早良平野や福岡平野における古墳時代前期の再開発集落は、西新町遺跡の消長と連動している可能性があり、湾岸立地集落の後方支援（土器や食糧の供給）、森林資源の開発拡大、交通ルートの変化などが考えられる。

糸島平野・福岡平野の中間に位置する西新町遺跡が古墳時代前期前葉の対外交易の新たな拠点として形成され、ここにその機能が集約されていく背景には、伊都国、奴国、畿内政権等、複数勢力の政治的なバランスが絡んでいると考えられる。倭王権が外交・交易の一元的な掌握をめざした萌芽ともみるが、西新町遺跡は古墳時代前期後葉には衰退しており、その実現には、7世紀後半の筑紫館（後の大宰府鴻臚館）成立まで300年以上を要することとなる。

【註】

1 藤崎遺跡は弥生時代前期から後期も墓域であったが、対応する集落は不明確であり、早良平野の近隣複数集落の共同墓地であったと考えている。古墳時代の墓域も、西新町遺跡集落だけではなく、複数集落の墓地であった可能性がある。

2 煙道が直線的で長いタイプのI類とII類には連続性があり、分類が難しいものもある。例えば、17次1号建物のカマドは、報告書でIIa類とされるが、相対的に大型な建物の隅角付近にカマドがおさまっている点から、I類

の範疇とみている。

3 各建物の築造から廃絶までの一定期間の中で、一時期、併存していた想定である。

4 古墳時代前期を通じ、西新町遺跡の港は石錘の一括出土がある 17 次調査区よりも北の、遺構が希薄になるエリアと推定される。荷揚げなどもそこで行われたと考えられる。交易品等を保管する倉庫については不明であるが、掘立柱建物群が集中する倉庫域のようなエリアは遺跡内で確認されておらず、形成されなかった可能性が高いのであろう。遺構としては認識が難しい簡易な構造の倉庫または堅穴建物を倉庫として利用することがあったのであろうか。後述する中原遺跡（唐津平野）では堅穴建物とはエリアを別にする掘立柱建物倉庫群がみつかっているが、博多湾沿岸の海浜砂丘上の集落では今のところそのような事例がみられない。

5 朝鮮半島系土器は古墳時代前期前葉から中葉を通じて 12・13 次調査区周辺を中心としたエリアからの出土であり、半島南東部産とみられる大型板状鉄斧（5 次 2 号建物）なども出土している。古墳時代前期前葉以降の朝鮮半島系土器は楽浪系土器に代わり、半島西南部系譜の土器が増加する（寺井 2006）。当該期も西南部系の各器種を主体として、南東部系の広口壺（5 次 6 号）、同小型壺（13 次 27 号、14 次 3 号）や、半島産とみられる倭系土器（17 次 7 号）などを含む構成である（第 56 図）。甌も半島西南部系が多く、南東部系や模倣品（13 次 78 号・40 号）を含むが、セットとなる甌は朝鮮半島系でなく、土師器と考えられている。

6 西新町遺跡は糸島平野と福岡平野の中間に位置する「出島」状の砂丘上に立地することから、孤立的な特定の場所での交易の集約化と情報の統制が指摘されている（久住 2007、寺井 2009）。久住氏は西新町遺跡を「伊都国」と「奴国」の中間とみて、古代社会の貿易港は中立地に成立するというポランニーの論とも対比している（久住 2007）。

7 様相が不明確なため表には掲載していないが、博多遺跡群の東には同時期の集落である吉塚遺跡や堅粕遺跡が分布する。また、近年の調査であるため未報告であるが、糸島平野北東部の今津 A 遺跡で古墳時代前期を含む製塩炉が検出されている。

8 西新町遺跡でもフイゴの羽口とされる土製品が出土しているが（古墳時代前期中葉の 12 次 64 号住居）、鍛冶にともなう鉄片や鉄滓の出土はなく、鉄器生産遺跡とは考え難い。断面形等は博多遺跡群のそれとは異なり、中原遺跡に近いタイプ（村上 2021）である。

9 古代の鴻臚館（筑紫館）と博多の関係に通じるものがある。

【参考文献】

石井陽子 2009 「博多湾岸地域における古墳時代の集落動態」『九州考古学』第 84 号 九州考古学会

磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次 1998 「博多遺跡群をめぐる環境変化」『福岡平野の古環境と遺跡立地』 九州大学出版会

大庭孝夫 2023 『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』 九州歴史資料館

久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』 XIX 庄内式土器研究会

久住猛雄 2004 「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』 大阪府立弥生文化博物館

久住猛雄 2005 「3 世紀の筑紫の土器～北部九州・特に博多湾沿岸周辺における外来系土器の受容と展開～」『邪馬台国時代の筑紫と大和』 香芝市二上山博物館

久住猛雄 2006 「土師器から見た前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会

久住猛雄 2007 「博多湾貿易の成立と解体」『考古学研究』 53-4

久住猛雄 2008 「福岡平野比恵・那珂遺跡群」『弥生時代の考古学 8 集落からよむ弥生社会』 同成社

久住猛雄 2012 「奴国とその周辺」『季刊考古学別冊 18 邪馬台国をめぐる国々』 雄山閣

- 久住猛雄 2017 「福岡県（糸島・早良・福岡平野）」『九州島における古式土師器』 第19回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 久住猛雄 2019 「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋南部・二日市地峡北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態Ⅰ 弥生時代終末期～古墳時代前期』第21回九州前方後円墳研究会佐賀大会実行委員会
- 小松譲 2013 「中原遺跡の弥生時代～古墳時代集落構造の変遷」『中原遺跡VII』 佐賀県教育委員会
- 小松譲 2014 「中原遺跡の弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落と墳墓」『中原遺跡VIII』 佐賀県教育委員会
- 重藤輝行 2009 「西新町遺跡出土の土師器の編年」『西新町遺跡IX』 福岡県教育委員会
- 重藤輝行 2018 「4～5世紀の九州地域の土器と渡来人集落・馬韓・百濟系を中心として」『日韓交渉の考古学－古墳時代（最終報告書論考編）』 日韓交渉の考古学・古墳時代研究会 韓日交渉の考古学・三国時代研究会
- 下原幸裕・重藤輝行 2009 「古墳時代集落の展開」『西新町遺跡IX』 福岡県教育委員会
- 白井克也 2001 「勒島貿易と原の辻貿易－粘土帶土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易－」『弥生時代の交易』 第49回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 武末純一 2009 「三韓と倭の交流－海村の視点から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』 151
- 武末純一 2010 「集落からみた渡来人」『古文化子談叢』 第63集 九州古文化研究会
- 辻田淳一郎 2013 「古墳時代の集落と那津官家」『新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』 福岡市
- 寺井誠 2006 「古墳出現前後における朝鮮半島系土器の故地とその流入背景」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』
- 寺井誠 2009 「一の町遺跡および糸島地域出土の朝鮮半島系土器」『一の町遺跡発掘調査概要』 志摩町教育委員会
- 寺井誠 2016 『日本列島における出現期の甌の故地に関する基礎的研究』（公財）大阪市博物館協会 大阪歴史博物館
- 早野浩二 2020 「古墳時代前期の都市的な遺跡と東海系土器－土器編年の併行関係の問題を中心として」『世界と日本の考古学』 常木晃先生退職記念論文集編集委員会
- 村上恭通 2021 「古墳時代開始期における鍛冶技術の変革とその背景」『纏向学の最前線』 纏向学研究第10号
- 平尾和久 2006 「生産と流通からみた伊都国と奴国」『伊都国歴史博物館紀要』 創刊号
- 平尾和久・上田龍児・小嶋篤 2024 「筑前における集落と古墳の動態」『集落と古墳の動態V総括』 第25回九州前方後円墳研究会佐賀大会実行委員会
- 福岡市 2016 『新修福岡市史 考古資料編1 遺跡からみた福岡の歴史－西部編－』
- 福岡市博物館 2015 『新・奴国展 ふくおか創世記』
- 森本幹彦 2010 「玄界灘沿岸地域における朝鮮半島系土器の様相2」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討－弥生時代を中心に－』 第59回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 森本幹彦 2011 「集落空間の変化、集落フォーメーションの展開」『古墳時代への胎動』 弥生時代の考古学4 同成社
- 森本幹彦 2013a 「樋井川流域周辺の弥生時代遺跡」『七隈史学』 15
- 森本幹彦 2013b 「北部九州の古式土師器からみた地域間交流の様相」『古墳時代の地域間交流1』 第16回九州前方後円墳研究会
- 森本幹彦 2015a 「外来系土器からみた対外交流の様相」『古代文化』 66-4

森本幹彦 2015b 「海人集団の東西」『みづほ別冊2 弥生研究の交差点 池田保信さん還暦記念』 大和弥生文化の会

森本幹彦 2018a 「奈多砂丘出土の朝鮮半島系土器」『福岡市博物館研究紀要』第27号

森本幹彦 2018b 「弥生時代後期の対馬の埋葬儀礼からみた日韓交流」『海峡を通じた文化交流』（第13回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会資料集）九州考古学会

森本幹彦 2019 「元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流」『元岡・桑原遺跡群34』 福岡市教育委員会

森本幹彦 2020a 「弥生時代の博多」『福岡市博物館研究紀要』第29号

森本幹彦 2020b 「玄界灘沿岸域周辺の中国系・楽浪系土器と瓦質土器」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書論考編）』 新・日韓交渉の考古学－弥生時代－研究会・同－青銅器～原三国時代－研究会編

森本幹彦 2022 「古代博多湾の交易特区？西新町遺跡からみた弥生時代の海人」『西日本文化』502号 西日本文化協会

森本幹彦 2023a 「考古学からみた新技術」『考古学研究』69-4

森本幹彦 2023b 「楽浪系・三韓系土器からみた弥生時代の北部九州」『季刊考古学別冊九州1』 雄山閣

森本幹彦 2025（刊行予定）「筑前地域（西部）の弥生時代後期集落」『弥生後期社会の実像－集落構造と地域社会－』六一書房

柳本照男 2024 『日韓古墳時代研究』同成社

吉田東明 2009 「西新町遺跡の竪穴住居作りつけカマド」『西新町遺跡IX』 福岡県教育委員会

吉留秀敏 2004 「集落・居館・都市的遺跡と生活用具－九州」『考古資料大観 10』 小学館

李啖澈 2018 「3～4世紀の土器資料からみた栄山江流域と日本列島」『日韓交渉の考古学－古墳時代（最終報告書論考編）』日韓交渉の考古学・古墳時代研究会 韓日交渉の考古学・三国時代研究会

【挿図出典】

第52図 福岡市史編さん室提供の地形図（宗建郎氏作成）に筆者加筆

第53図 森本2022図1、西新町遺跡8・9・16次調査報告実測図面より構成

第54図 下原・重藤2009第80図に加筆

第55図 福岡市博物館2015図版403、西新町遺跡13・14次報告実測図面より構成

第56図 下原・重藤2009第80図改変図と5・12・13・14・17・20次調査報告実測図面より構成

第57図 森本2025図6に加筆

第58図 小松2013図240、小松2014図208より構成

森本幹彦（福岡市経済観光文化局文化財活用部文化財活用課）